

審査の結果の要旨

論文提出者氏名 宮澤淳一

宮澤淳一氏の学位請求論文『グレン・グールド論』は、長年に渡りカナダ出身のピアニスト、グレン・グールド（1932-1982）の研究に携わり、このピアニストの著作や研究書に関する翻訳も多く手がけてきた宮澤氏が、初めて本格的な研究として自説をまとめたものであり、本文 339 ページに詳細な注が 110 ページ、さらに年譜と付録がついた包括的な内容とその規模は、グールドに関してなされてきた研究としては他国にも例を見ないものである。本論文において宮澤氏は、コンサート活動からドロップアウトした異色のピアニストと見なされるグールドの、そのドロップアウトの要因を、まずはグールドにとっての電子メディアの意義と同時代のメディア論との相関から解きほぐし、そうして誕生した、演奏会に出演しないピアニストという新しいタイプの演奏家グールドにおいて、「聴き手」という存在がいかなる変化を伴いながら表象されてきたかということの時系列的に追う。そして、そのなかでメディアを介した聴衆とのコミュニケーションをどのようにグールドが考察したかを検討しながら、実際にレコードに刻まれた演奏を丹念に分析することが、本論文のひとつの大きな柱になっている。

しかしながら、本論文のもうひとつの骨子は、こうしたグールドというピアニストを作り出した文化的な環境への検討を、出身地のカナダにおけるナショナル・アイデンティティの問題に接続したことであり、カナダのなかでもとくに「北」というものへの独特の思考、「北の理念」が、グールドの演奏様式、ひいてはグールドというピアニストの演奏家としての人格形成や演奏美学に深く関わってきたことを主張する。これは、従来グールド研究者の誰も包括的な議論を行ってこなかった主張であり、その意味で本論文はグールド研究にとって、さらには演奏研究・演奏家研究一般にとっても、大きな指針を与えるオリジナリティを持っている。

論文は3つの章から構成されており、第1章「メディア論 聴き手とは誰か」では、1964年に宣言された「コンサート・ドロップアウト」を中心に、それに到る経緯とその後のピアニストとしての活動の意義が多くの資料を駆使して検証されてゆく。電子メディアへの信奉を高めてゆく過程には、グールド特有の「歴史的進歩主義批判」があり、一見新時代の申し子に見えるこのピアニストが、保守的とも言える音楽観や作曲観を持ち、同時に、あらゆる時代の様式の併置を可能にするような音楽の「環境」を考えていたこと、そのために録音メディアが大きな力を持ちうると考えていたことなど、意外とも思われるようなピアニストの実像が丹念に描かれてゆく。

ドロップアウト後のグールドは、電子メディアから録音メディアに興味の焦点を絞り、そのなかで新しい聴き手像を預言しつつ模索した。宮澤氏によれば、この模索は必ずしも成功したとは言えないが、演奏会を否定したにもかかわらず、グールドのすべての営為が、「創造的な聴き手」の成立に向けた努力として、聴衆とのコミュニケーションの樹立を目

指してなされていたことが指摘される。

宮澤氏の資料渉猟は、あらゆる枝葉末節にいたるまで徹底しており、グールドに関する文献は、本人の手になる著作はもとより、グールド・アーカイヴに残された原資料、第三者の証言、録音資料等々、可能な限りのすべてのものにおよび、また従来 of 諸々の研究書の細部にいたるまで批判的検討が行われている。迫力さえ感じさせるその遺漏なき緻密さに関しては、審査員全員が驚嘆するところであった。

第2章「演奏論 《ゴルトベルク変奏曲》をめぐって」は、グールドがキャリアの最初と最後に録音した J.S.バッハの鍵盤曲《ゴルトベルク変奏曲》の2種類のレコード（1955年と1981年の録音）の演奏分析を通じて、そこに代表される演奏家グールド像を跡づけてゆく。その足跡は、グールドにとってひとつの自己克服の道であり、超越への希求がこのピアニストの演奏キャリアを巨大なアーチのように取り結ぶ要素であったことが確認される。《ゴルトベルク変奏曲》の比較演奏論に関し、本論文において新たな知見ないし見解として提示され評価されるべきなのは、最初の録音にさらに先だつて、グールドにとっての初演奏として生放送されたもうひとつの演奏（その録音は復刻された）が持つ意義であり、そこに刻まれた生理的要素に由来する限界の克服のために、グールドが録音メディアに向かっていったことである。また、こうして開始したピアニストのキャリアのなかで、かつての演奏、かつての自己を乗り越えるために、グールドは作品全体をひとつの「パルス」の連続として表現することを意図し、それによる一元論的な発想、単一原理に基づく演奏のひとつの精華が2度目の録音であることが、詳細な分析を通して検証される。

自己超克への意志という視点は、第2章と次の第3章「アイデンティティ論 グールドはなぜカナダ人なのか」を取り結ぶ結節点である。ここでは、まずカナダの国民文化形成のための議論の過程で、カナダ文学の自律性、英米文学からの独立性を主張するためにマーガレット・アトウッドが用いた「サヴァイヴァル」という概念を援用しつつ、それに先立つノースロップ・フライによるカナダ人のメンタリティ分析ないしは「駐屯地根性」という概念なども参考にしながら、「静寂で荒涼たる場所」として表象される「北」のイメージを内包するカナダと、そこからの「生き残り」ないしその「超越」こそ、グールドの美学を究極において支えているものであるという見解が示される。そして、その主張のもとに、グールドが残したラジオ・ドキュメンタリー『北の理念』が分析され、そこに読みとれる「孤独」と「隔絶」の独特の結びつきこそ、カナダ人のメンタリティとしてグールドに共有されるものであり、そこにこそこのピアニストのアイデンティティが投影されていることが確認される。

ピアニスト、グールドの人格を「後背地」として支えるカナダ文化への指摘は、これまでのあらゆるグールド論に欠けていたものであり、その意味でここでの宮澤氏の主張と分析は本論文のなかでももっとも挑発的でスリリングな部分であると同時に、若干の問題点が指摘された箇所である。「カナダ性」というものの時代を追った変化、当時の「カナダ性」の議論そのものの位置づけが考慮されておらず、それが固定的に捉えられており、図式的にすぎる点は複数の審査員から指摘されたが、宮澤氏の視点がグールドという個性の発生に関する重大な指摘を含んでいることは、全員一致して認めるところであった。

これまで語られてこなかったカナダ性の指摘からグールド研究を新しい方向に広げる可能性を示唆した本論文の意義は、今後さらなる可能性へと開かれている面を残すとはいえ、

現時点での学術的成果としてはきわめて高い水準にあることは疑い得ない事実であり、日本という枠を越えたグールド研究、ひいては演奏研究、演奏家研究の場に対しても多大の示唆を含んだものである

以上をふまえて、本審査委員会は本論文が博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。